

お正月

― 回想 入来の出来事 (1) ―

中山とし子



故郷のことを思い出す時、それはほとんどの場合伝統行事と共によみがえります。私は終戦から五年目の一九五〇年に生まれました。幼児期から学童期（一九五五〜一九六五年）、日本はまだ貧しかったものの、未来への植音が高らかに聞こえ、大人も子供も顔を上げ、生活の中に笑い声が絶えなかった明るい空気を思い出すのです。そして、先祖から伝わる伝統行事や風習は、戦争から復員しやっと農作業や伝統行事に取りかかれるようになった家長たちの責任によって日々の暮らしの中に復活してきたのではなかったかと思うのです。

一九八九年に発刊された『聞き書き鹿児島県の食事』（農山漁村文化協会発行）は、昭和初期の鹿児島県の地域別の食を取り上げています。その中に「北薩摩〈農耕士族〉の食」も取り上げられています。食は伝統行事と共にあり、正月の本膳の献立や「穂垂れ引き」の興味深い献立の内容に懐かしさもひとしおです。しかし、それらは世の中の近代化と共に次第にすたれて行ったものも多かったと思うのです。ここでは、私が小学生から中学生の頃に実際に経験した伝統行事を、思い出す限り正確に書き起こしてみようと思います。

お正月準備

お正月の準備は歳の暮れから始まります。まず、①屋敷周りの竹笹垣を新しいものに変える事。②門松に使うシラスと庭を浄めるためのシラスを集落で決められた場所に取りに

行く事。門松に使用する花木を山に取りに行く事。③副田温泉場に立つ歳の市で毬つき用の毬や新しい衣類や鍋や農機具や食材を調えること。④餅つき。

①竹笹垣の取り換え

竹笹垣を取り換える事は、現在では何のこゝとやら想像できない方が多いのではないでしょう。今から六十年〜七十年くらい前、入来の農村地帯の屋敷は、小さな屋敷林と小さな菜園畑と牛小屋と人の住まいから成っていました。

この屋敷全体を孟宗竹の枝を束ねた笹垣で囲っていました。我が家のように小さな屋敷ならまだ作業は軽くてすむけれど、大きな農家は長い笹垣を毎年正月前に取り換えねばならず、大変な作業でした。私が小学生低学年の頃に手伝われた記憶があるので、一九六〇年くらいにはまだやっていたと思います。

六十年代（昭和三十五年）以降、日本経済の急激な発展と共に家屋敷の改築も進み、笹垣の代わりにブロック塀にしたり、イチイの木を植栽で垣を作ったり、山茶花の垣根などが使われるようになった記憶があります。因みに、次ページの写真は、現在でも行われている笹垣の例です。

さて、その作業手順ですが、まず去年の竹笹垣の縄をほどいて古くなった竹の枝を取り除きます。代わりにまだ青い笹のついた笹枝を、孟宗竹を半分に分けて横に渡した状態の割竹で前後から挟んで隙間なく並べながら、ところどころを荒縄でくくって止めて行きます。この繰り返しによって新しい垣根ができて行きます。父親一人でやるには大仕事なので、笹竹を運んだり捨てたりの子供たちの手伝いが必要です。なぜ毎年造り替えるのか、理屈を考えだすと非合理的に思え、私はこの



唐津さるき元石町（佐賀県唐津市）の笹垣



桂離宮（京都市）の笹垣

手伝いが一番負担でした。

ただ、最近思うのですが、当時は大変面倒だった一年に一度の笹垣の取り換えは、去年のものが古くなったから、というだけだったのだろうか。

伊勢神宮の二十年に一度の式年遷宮や春日大社での式年造替のように、「新たに作る」

「改める」ということが、日本が古代自然から学んだ精神の基軸として、生活の中に連綿と存在していたのではないか。あれは神迎えという形の、家の神への儀礼でもあったのではないか、と思うのです。多分、日本の風習について調べれば、もっと正確なところがわかるのでしょうか。目に見えないものを正しく恐れ敬うことは、時代が変わっても忘れてはならないと思います。

現代社会は、科学、科学と言うようになってから、物の考え方が薄っぺらくなったように感じています。そして、伝統的に行ってきた細かい風習を面倒なもの非合理的なものとして捉えるようになりました。思い返すと、竹笹垣の造り替えは、青々と元気のよい竹笹によって、屋敷全体が入れ替わったくらい晴々と改まった気持ちにさせてくれ、自然と正月を迎える気持ちは高まったのです。

②門松作りとシラス取り

現在では家の門に門松を立てる家はめったになく、寺社やホテル、食べ物屋さんくらいしか無くなってしまったように思います。あの頃入来では、リヤカーいっぱい採ってきたシラスで三角錐の山を門の左右に一つずつこしらえ、シラスの中に直接正月を寿ぐための花木を挿しました。松、竹、梅の枝、実花、などを束ねて挿した門松を一对作るのです。これらの花木は、すべて山にありました。時には南天の枝も入っていたかもしれません。砂に挿すわけなので木々は翌日には半枯れてしまいます。

この、砂に直接瑞木を挿す門松の方法は、奈良市にある菅原天満宮のものと同じです。門松は鳥居の脇に設えられます。この天満宮は、奈良に住んで以来の我が家の氏神様ですから、もう四十年以上のお付き合いになります。



菅原天満宮（奈良市菅原町）の鳥居脇の門松

す。宮司様によりますと、ここは、日本最古の天満宮だそうで（ここ菅原町は、菅原家発祥の地とされます）、門松には松竹梅と南天などが入っています。松は左右に雄松と雌松を入れるそうです。伝統的にこのようにして、神社の山で取れるものだけで門松を作って来られたそうです。知らない人には手抜きに見えるかもしれませんが、これを初詣で見たと、故郷の門松も元々の歴史的形態を継承していたのか、と強く感動しました。

③歳の市

本田親虎氏が中心になって編纂された『入来町誌 上巻』にある手書の「入来町小字地図」によると、毎年歳の市が開かれたのは副田温泉場の若松町の商店街の通りです。

植木、衣類、刃物、おもちゃ、人形や羽子板や正月用品の露天商に混じって忘れられないのは、どこことなぐうさん臭い薬売りのこと。

蓄膿薬や傷薬の他に蛇を踊らせる見世物もあって、その周りには特に大勢の人が集まっています。何を売っていたのか不明。スーパーに行けば何でも手に入る現代と違い、正月用に特別に毬や手袋や独楽を買ってもらった歳の市は、子供心に楽しい思い出です。

④餅つき

子供たちにとって正月準備で一番嬉しい日です。餅つきの日は決まっていて、暮れの三十日に行います。餅つき機のなかった時代、臼と杵ともち米を蒸す木製の蒸籠（せいろう）は各家にとって必需品でした。親戚中が集まり数軒分の餅を搗く日は、まるでお祭りのようでした。叔父叔母、いとこたちが集まり、三段の蒸籠に蒸し上がったもち米を、時には二つの臼に順番に入れ、男たちが杵をふるい、女たちは白いかっぱ着を着て、頭に姉さんかぶりの手ぬぐいをして、合いの手を入れな

がら賑やかに手水を差していました。

その周りで子供たちは、縁側に座ったり庭をウロウロしたりしながら、蒸籠の底に敷いてあった大量のご飯粒のついた竹の棒を、ハローモニカを吹くように持ち、一粒も残さないように食べるのが仕事のひとつだったことを思い出します。蒸したもち米は、香りと甘い甘さと云い、極旨超一級品でした。今でも忘れられない美味しさです。

軒数分の鏡餅、大中小のお飾り餅、のしもち、栗の餅、ねったぼ（餅に蒸したサツマイモを練り込んだもの）などができ上がるにつれ、大人たちは柔らかいねったぼをひよいひよいとおやつにくれたり、つきたての餅に黒砂糖をくるんで共におやつに食べたり・・・。

農家の人々にとっては、自分の田にできた米で餅を搗くことは、一年で一番誇らしい行事だったのではないのでしょうか。

元旦

一月元旦は神と共に過ごす日とされ、誰も自宅の敷地から出てはならない日とされてきました。庭にはお浄め用の白砂であるシラスが、五十センチから一メートルくらいの幅をもって、玄関から木戸口へ、井戸へ、厠へ、屋敷の東隅に祭られている荒神様へと、白道のように撒かれてあり、一月一日は、人間はその白道の上しか歩いてはならないとされてきました。

おぼろな記憶ではあるが、玄関から木戸口までは、約八メートル。井戸は家の裏にあり、グルリと回れば十メートル以上。厠までは五メートルくらいだったか・・・。門松の土台以外にこの浄めの道用のシラスが必要だったので、シラスの量もかなりのものになります。重労働であるこのシラスを決められた採砂場

から取って来るのは家長の仕事であり、車のなかった時代はリヤカーに箆を敷き、その上にシラスを載せて運びました。父はよく、一番小さい弟を連れて行ったものですが、まもなくこの面倒なお浄めの道は無くなりました。元旦の朝は、表座敷に家族全員が四角い塗りの膳を前に並び、「おめでとう」の家長の挨拶の後お年玉が一人一人に渡されます。子供にとつては、これが一番うれしかった。生活の大体の事が沈黙の中で行われ、家族間でも、物を言う時は神に聞こえないように小さな声で喋るよう親に注意された記憶があり、あれは何だったのだろうか、と今不思議に思います。神様の休みの日だったのででしょうか。

その後、儀式用の膳を頂きます。元旦の膳には、干し海老の澄まし仕立てのお雑煮(干しシイタケ・白菜・三つ葉・かまぼこを加えます)、鶏(かしわ)の中皿(根菜類とコンニ

ヤク・厚揚げなどを煮しめたもの)、鶏の刺身(カシワ)、おぼ(クジラの皮の部分の脂を抜いたもの)の酢味噌かけ(最近ではあまり見かけません)、甘く煮た金時豆、大根膾など、毎年変わることなく同じ献立でした。

正月二日からが親戚への挨拶回りで、小さいながら本家であった我が家は、毎年二日が客迎えになっており、伯父夫婦や伯母たち一家がやってきて毎年忙しかった事! 三日、四日になると、あちこちの親戚にあいさつ回りに行き、子供ながら一人前の御馳走の膳を据えてもらったけど、お膳のすべてを平らげるのは子供には辛くて、ただお年玉だけが楽しみでしたっけ。

中学生ともなると玄関での挨拶回りだけになり、急速に正月の挨拶回りは廃れていったように記憶します。

何かにつけ神と共にあったあの頃が、たま

らなく懐かしく思われます。

小正月の「穂垂れ引き」からは、次号に寄稿する予定です。

(エッセイスト)

